

小説神髓

映画文学人生論

坪内逍遙 (1859-1935)

『小説神髓』 1885-86 「松林堂」

『当世書生氣質』 (1885-86) 「晩青堂」

二葉亭四迷 『浮雲』 (1887-89) 「金港堂」 「都の花」

『私は懷疑派だ』 (1908) 「文章世界」

『小説総論』 (1886) [中央学術雑誌]

小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情とは所謂百人煩惱是れなり。

坪内逍遙の『小説神髓』は明治十八年に発表され、小説を文学の主流に押し上げる役割をはたした。その主張でよく知られているのは、「小説の主脳は人情なり。世態風俗これに次ぐ。人情とはいかなるものをいふや。曰く、人情とは人間の情慾にて、所謂百人煩惱是なり」、及び、「『八犬伝』中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とはいひ難かり」である。

難解な文章だが、ボンクラ頭でもなんども繰り返して読んでみると、おぼろげながら意味がくみとれる。人間には百人種類の心の迷いがあり、そのような心の迷いを文章でそのまま写實的に模写するのが小説の神髓だという意味のようだ。

曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』は、百人種類の心の迷いを模写した小説とはいえない。それぞれに仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の文字のある数珠の玉（仁義八行の玉）を持つ八犬士は仁義八行の化物であって、人間とはいいいにくい。作者が人物の背後にあつて、糸をひいている様子が見え透いているという。

この小説観には西洋の科学文明の考え方が反映されていると思う。科学は事実を調べ、実験を繰り返して、発明、発見に結びつけるが、結果の善悪は問わない。原子爆弾や原発の核廃棄物がどのような災害をもたらしても責任はとらない。



小説神髓

映画文学人生論

このような科学的小説観にそのまま便乗したのが、田山花袋、島崎藤村ら自然主義の作家で、ささやかな抵抗の姿勢を示したのが二葉亭四迷、森鷗外、夏目漱石の三人だと私は思う。

二葉亭四迷は、坪内逍遙の名前で発表した『浮雲』が言文一致体による日本初の近代小説という評判をとったが、「私は到底文学者じゃない。私は、まア、懐疑派だ」と自己否定した。

森鷗外は、文学には理想が必要ではないか、として逍遙のひきいる早稲田派に論争を挑んだ。いわゆる没理想論争である。

夏目漱石は、文芸上の真が科学上の真とは違うとして、「凡（およ）そ文学者の重（おも）んずべきは文芸上の真にして科学上の真にあらずと断定した（『文学論』）。

しかし、彼らの晩年の作品、四迷の『平凡』、鷗外の『渋江抽斎』『伊丹蘭軒』『北条霞亭』、漱石の『道草』『明暗』などはいずれも『小説神髓』の主張の通り、百人煩惱を写實的に模写した作品のような印象を受ける。

つまり、三人の文豪は『小説神髓』の主張に抵抗を示したものの、結局は屈したといえるのではなからうか。そのせいも、彼らの晩年の作品は、文芸評論家には高く評価されている。ただし、一般読者にはあまり読まれていないようだ。

冬隣裸の柿のをかしさよ 坪内逍遙